

臨床
医学基礎
医学

臨床医

大学教員(臨床医学)

大学教員(基礎医学)

臨床医から基礎医学研究へ。医学者への道。

細谷紀子 (東京大学大学院医学系研究科疾患生命工学センター 講師)

仕事の内容とやりがい

—ミクロの世界から、がんの病態解明と治療開発に挑む—

細胞にとって致命的な損傷であるDNA二重鎖切断に対する生体の応答現象を分子レベルで研究しています。全ての細胞には、DNAが受けた傷を修復し、遺伝情報を正確に維持するシステムが備わっていますが、その破綻は、がんの原因となる上、DNA二重鎖切断を作り出すことによってがん細胞を撲滅しようとする放射線治療や抗がん剤治療の原理にもつながります。血液・腫瘍内科医として一貫してがんの病態解明を目指してきた私にとって、未解決の問題が多く、染色体異常が生じる本質に迫れるこの領域に取り組むことは、大きな魅力です。

進路決定のきっかけ

高校に入学した頃、担任の先生が教室の黒板に「What is life?」と書かれました。今のライフワークにつながる素敵な問いかけだったと思います。その後、DNAや減数分裂などについて学び、生命科学に携わりたいという夢を抱くようになりました。大学の夏休みには、東京大学医科学研究所の研究室に通い、相同組換えや発がんのメカニズムを解き明かそうとする先生方の情熱に深い感銘を受けました。このような経験や思いは、大学卒業後10年余りの臨床の経験を経て基礎系の教室に移る決心をする際に後押ししてくれました。

仕事と家庭のバランス

臨床の教室でのポストドク時代に2人の子供を出産しました。実家は遠方にあり、子供たちが乳児の頃は夫が海外へ単身赴任していました。日本で子供を育てながら研究中心の生活をした後、夫が帰国し、下の子供が3歳になったのを契機に、ベビーシッターなどのサポート体制を強化して病棟のスタッフになりました。基礎系の教室に移ってからこの頃に築いたサポート体制が生きており、大好きな研究に人生をかけている今があることを幸せに思います。一緒にいられる時間は短くても、子供たちが親を慕ってくれる喜びを日々感じています。

進路選択に対してのメッセージ

自分の可能性に自分で制限を設けなくて、一度しかない人生に思いっきりチャレンジしていただきたいと思います。進路を決める重要な時期が来るまでに、幅広い分野を見渡して、自分がワクワクして打ち込める対象を模索しておくことが大切です。医学という道一つをとっても、様々なキャリアパス、活躍の場があります。その時々で自分の興味に基づいた悔いのない選択をし、選んだ場所では最大限の努力をする一方で、転機が来たことを直感した時には、チャンスを逃さずに軌道を転換する勇気と柔軟性を持つことも必要かもしれません。

＜細谷紀子 (ほそやのりこ) プロフィール＞

1987年、千葉県立千葉高等学校卒業。1993年、東京大学医学部医学科卒業。2年間の内科研修の後、東京大学医学部附属病院第三内科血液グループ(現血液・腫瘍内科)に入局。1999年、東京大学大学院医学系研究科博士課程修了、医学博士。以後、日本学術振興会特別研究員、東京大学医学部附属病院無菌治療部助手等を経て、2006年、東京大学大学院医学系研究科疾患生命工学センター助手。2007年、同助教。2012年、同講師。2008年、第一回資生堂女性研究者サイエンスグラント受賞。2009年、(財)放射線影響協会 第3回放射線影響研究奨励賞受賞。2011年、日本放射線影響学会若嶋氏子賞受賞。一男一女の母。

